

## 真をめる者、ウマル (3/3) : 信仰者の

:

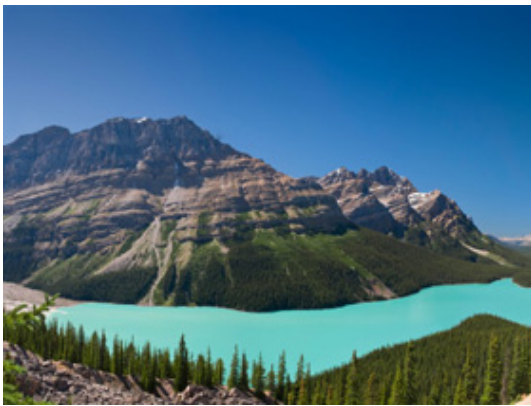
明:ウマルは正、大な心、そして敬虔さの模でした。

目:[事言者ムハンマド彼の教友たちの物](#)

より: ア イシャ ステイシ

日 04 Mar 2013

集日 04 Mar 2013



ウマルブンアル=ハッタブは、ムスリムのウンマ（国家）における第2代目の正カリフで、信仰者のと呼ばれた最初の指者でした。言者ムハンマドの逝去、彼に最も近かった盟友であるアブバクルが彼のをぎ、2年に渡ってムスリムたちを率いました。アブバクルが自らの死期が迫っていることを悟ると、彼に近い友人や近たちを集め、彼らの任がったことを告げました。アブバクルは自らの者を彼ら自身で出することを望んだのです。しかし、の、彼に疑いの念を全く抱かないアブバクルの教友たちは、彼がしてくれるようみました。アブバクルはウマルをしました。

アブバクルの周りには、非常に辛辣で屈な男として知られたウマルが人々にしくするのでは、という念が一部でありました。アブバクルは、彼にとってウマルこそが人々の中でも最の人物であるという返答をしました。当初、マディナの人々によるこうした反もありましたが、ウマルは第2代目のカリフとして任命されました。彼は、自分の

持つ展望を人々へと直ちに演し、その治を始しました。ウマルは、人々が彼の固な部分について心配していることを知っており、そのことについてもりました。

彼はこう述べています。「人々よ、私はあなたがたの事において治するよう任命されたことを知りなさい。私の固な部分については弱まったことを知して欲しい。だが、抑的、また逸脱した者たちについては、これからも固かつしくありけ、それら者たちのを地べたに押し付けてやろう。また、私は自分のを地べたに押し付けてでも、敬虔な者を守りぬいてみせよう。」

それからウマルは人々にし、彼は神が命じたもの以外にはして彼らの作物や利品などからせず、その入は神をご悦させるため以外には消しないことを明しました。ウマルは政面における公正さの重要性はもちろんのこと、ムスリムのウンマに属するいかなる小さな位の通であれ、その法や使い道についてはやがて神によってされることを熟知していました。また、ウマルは人々への支や入を加させ、国境を防することも告知知らせました。

言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）とその教友たちが、必死にき上げた若きムスリム国家は、独性に溢れていました。ムスリムの国からは、ウンマのすべての住民にしての配当が支われていました。急速にをけていた国家における政府の事者であるかどうかにかかわらず、その富は等しく配分されていたのです。それを制度化したのはウマルではなく、彼はただ先人のき上げた例にっていたのですが、入の加を束したのは彼自身の提案によるものでした。

またウマルはムスリムのを「破」へとは派遣しないことを束しました。つまりリスクが定され、容可能なものでない限りはそうしないということです。彼は兵士が期に渡って家族とれれにならないこと、そしてもしもらぬ人となってもカリフは彼らの家族の面倒をるということを束したのです。ウマルは、指者の役割とは人々の保であると信じていました。

大や首相らがボティガドにまれ、自らの威を守るためには他人を踏みにじることをもわれないような代においては、こうした概念は非常に奇に映るものです。ウマルブンア

アル=ハッタブは、一大帝国の指者であったにもかかわらず、ボティガドをつけることの必要性を感じることはありませんでした。彼はたとえ夜であっても、一般市民のようにマディナの街路を歩いていました。事、彼は夜になると密かに回りをしつつ、喜を配布していたのです。

ウマルによる治期には、「灰の年」と呼ばれた期があります。この年、ムスリムのウンマにとっての大きながもたらされました。当、干魃とがい、が皮にあたると、それはまるで燃えが皮をくほどにいものでした。食肉、バタ、乳は手に入らなくなり、人々は乾燥したパンの切れ端に油をってえをしのみぎました。ウマルは、人々に供されていないものはしてみ食いしないと誓いました。食品が市に供されるようになってからも、ウマルは上げされたそれらのものをうことを拒否しました。彼がこう言ったのが耳にされています。「もし私が臣民たちと同じを受けているのでなければ、どうして臣民たちのことを心配し、理解することができようか。」

ウマルは、その治から1400年以上たった今でも、正の人としてされてけています。イスラムの正、慈悲、思いやりといった原理に基づき、富の差、皮の色、力の有にわらず、ウマルは治する人々をみな平等にいました。彼は神によってやがて彼の行がされることを常に怖れていました。彼は人々の中に、きちんと世がされていない病人や困者がいないかどうかを揉んでいました。ウマルブンアル=ハッタブは、裁判官や督のを欲していた者たちを任命したのではなく、ウンマの中の最も敬虔な者たちを注意深くんで任命したのです。

ウマルは自らを一般のムスリムとしてしていましたが、史によるはそれとは程いものです。ウマルは精神面 肉体面の双方で力く、切高で、慎み深い生活をみました。ウマルは彼の敬する言者ムハンマドの志を受けぎ、彼の模にい、彼のを遵守させました。神のを恐れ、を求めているウマルは、その全存在をかけて、神のご悦を得ることに身を注いだのです。ウマルは真をめることができ、ウンマの中のかが感じる痛みを自らも感じ取ることができ、かが神の崇に足すれば、自らも喜びを感じたのです。ウマルは正4代カリフの一人でした。在においても、彼はさ、正感、情、慈悲における模でありけています。

---

## Footnotes:

1

これは当のアラブ人たちが使用していた用句で、しいを示す言として使われていました。それは、他者への抑とは完全にめられないことを意味しました。

この事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/2135>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2024 IslamReligion.com. 断 を禁じます。